有島武郎全集

別巻

有島武郎全集

別巻

筑摩書房

有島武郎全集別卷
昭和六十三年六月三十日　初版發行

編者　瀨沼茂樹
　　小田切進
發行者　關根榮郷
發行所　東京都千代田區神田小川町二ノ八
　　筑摩書房
　　郵便番號　一〇一―九一一
　　電話　〇三(291)七六五一(營業)
　　〇三(294)六七一一(編集)
　　振替　東京　六―四一二三
印刷　株式會社精興社
製本　株式會社鈴木製本所

ISBN 4-480-70916-9　Printed in Japan

目次

補遺

短歌……三

俳句……四

書簡……五

書簡補訂……三〇

有島武郎研究

年譜……九一

著作年譜……一八五

有島家關係資料・周邊資料……二三三

有島行重家系圖 …… 二三五
有島家譜畧寫〔抄〕 …… 二三九
神尾家系譜略 …… 二四二
戸籍謄本 …… 二四六
三省之勸 …… 二四九
故有島武氏作諸報告書案文集（『有島武手記集』） …… 二五五
母のおもかけ …… 二七三
有島幸子家集〔抄〕 …… 二八九
松むし …… 三二六

〔學習院成績表〕 …… 三四〇
〔札幌農學校卒業生名簿〕 …… 三四七
Catalogue of Haverford College 1903–1904〔抄〕 …… 三八〇
Friends' Asylum for the Insane …… 三七三
札幌獨立基督教會　日誌〔抄〕 …… 三八一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

札幌獨立教會日曜學校記錄〔抄〕……三六六
〔農場開墾に關する書類〕……四一〇
口演覺書……四一五
小作契約書……四一五
小作料約定証書……四一六
有限責任狩太共生農團信用利用組合設立の由來……四一七
有限責任狩太共生農團信用利用組合定款……四一七
狩太共生農團信用利用組合處務細則……四一三
飯田伊佐夫手記……四一五
鎌倉丸の艶聞……四一七

同時代評

十月の創作界　中村星湖　四一五
讀んだ儘の印象を　廣津和郎　四一七
斷片語　岩野泡鳴　四一五
有嶋武郎氏の作品　中村星湖　四一八

七月の文壇　中村孤月　四四一
カインの末裔　南部修太郎　四四三
七月の創作界　宮地嘉六　四四四
親不知の嶮へ行く　前田晁　四四五
作中人物の責任　前田晁　四四八
有島武郎氏の印象
極めて人間的なる人　足助素一　四五四
ノーブルな性質の人　長與善郎　四五七
兄さんのやうな感じ　小山内薫　四五八
教師としての武郎氏　X Y Z　四五九
世を達觀した聖者風　尾島菊子　四六一
札幌時代の有島君　吹田順助　四六三
九月の文壇　中村孤月　四六四
九月の小説と戯曲　江口渙　四六五
新秋の文壇　西川勉　四六六
孤塚にて　前田晁　四六六
十一月の小説　江口渙　四六七
有島武郎氏の愛と藝術論　岩野泡鳴　四六八
有島武郎氏に與ふる書　田中純　四七三
文藝時事（お産の描寫）　近松秋江　四七五
有島武郎論　江口渙　四七八
白木蓮の樹蔭から　南部修太郎　四八四
四月の文壇に就ての雑感　菊池寛　四八五
二三の作品について　加能作次郎　四八五
思想界のゴシツク精神　西川勉　四八七
有島武郎論　木村毅　四九〇
何の爲の民衆か　加藤朝鳥　四九五
有島武郎氏の『死』の考察に就いて　秋田雨雀　四九六
有島武郎論　福士幸次郎　五〇〇

有島武郎論　宮島新三郎　五一〇
月評特別號だけ　本間久雄　五三一
一瞥した四月の作品　細田源吉　五三三
有島武郎論　石坂養平　五三三
有島武郎氏の小說に現はれたる思想　齋藤勇　五三七
大正八年度の文藝界　芥川龍之介　五四一
藝術鑑賞の悅び　本間久雄　五四三
有島武郎氏へ　本間久雄　五四五
愛の本質に就いて　石坂養平　五五一
有嶋武郎氏の「愛」の哲學　米川正夫　五五三
貝殼追放「御柱」雜感　水上瀧太郎　五五七
『御柱』その他　本間久雄　五六三
有島武郎氏の窮屈な考へ方　廣津和郎　五六三
一月の文壇評　生麥より　中村星湖　五六七
階級藝術の問題　片上伸　五七〇
新年號の評論から　平林初之輔　五八一
苦笑生活の文學（雜感その三）　田中純　五八三
有島武郎氏の絕望の宣言　堺利彥　五八九
有島武郎氏に與ふ　廣津和郎　五九五
藝術と階級　宮島新三郎　六〇一
なんのかゝはりもなし　里見弴　六〇五
好いお道樂　近松秋江　六〇七
最近の諸問題を報ずる書　本間久雄　六一三
有島武郎氏の態度　片上伸　六一三
階級鬪爭に於ける知識階級、文化、及び藝術の問題　室伏高信　六二七
有島武郎氏へ　藤原鐵乘　六四六
個人主義者と社會主義者　河上肇　六五三
知識人の現實批判　青野季吉　六六六

有島武郎氏の想片　室伏高信　六七〇
有島氏の農園放棄　堺利彦　六七五
有島氏の戯曲に就いて　大關柊郎　六七六
無産者文學のために　平林初之輔　六八〇
有島武郎氏の『酒狂』　今野賢三　六八二
有島武郎論　青野季吉　六八四
有島武郎君の生活革命　森本厚吉　六八七

追悼特集紙誌論評・追想

現實の人生　蘇峰生　六九五
交遊、思想、作物、二つの手（追憶手記）　藤森成吉　七三一
短かりし交りの追憶　秋田雨雀　七三七
諸方より故人を悼みて足助氏に宛てたる書　河上肇　七四二
最後の編輯を終へて　七四五
『泉』終刊有島武郎記念號
淋しい事實　足助素一　七〇〇
「武郎君」　木村德藏　七〇七
火の前に立ちて　末光績　七三一
悲しみて　與謝野晶子　七三五
○　茂木由子　七三六
黒耀の下に　橋浦泰雄　七三六
『文化生活』記念增大號純眞の人有島武郎九月號
純眞の人　森本厚吉　七六二

有島君のやうな人を造りたい　星野勇三　七六六
たゞ涙ぐましい　松本　巍　七六八
最後の悲曲　竹崎八十雄　七六八
或る時代の有島さん　田中義麿　七七〇
師の死に面して　八木澤善次　七七三
眞劍な人　末光信三　七七六
有島先生の死の聯想　大石泰藏　七七八
胸友有島君を懷ふ　森本厚吉　七八一
永遠に生くる先生　秋野豐太　七八六
追想　木田金次郎　七九〇
遠友夜學校の功勞者　半澤　洵　七九三
理想主義者の死　秋田雨雀　七九五
力强い歩み　石本靜枝　七九七
友の遺書に答ふ　森本厚吉　七九八
札幌の有島先生　野中時雄　八〇四
人間愛の深かつた先生　辻　義一　八〇五
少年時代の有嶋君　佐山英男　八〇八
學習院時代の有嶋君　曾我祐光　八〇九
ホキットマンを讀める日　泉　天郎　八一〇
眞と純と美と　橘　儀一　八一一
有島氏の死の道德的默示　F・W・ブラウン　八一三
惜しかつた　村田　勤　八一四
日曜學校時代の思出　坂本宗一郎　八一五
生に成功した人　吉野作造　八一六
背敎者としての有島武郎氏　内村鑑三　八一九
同胞に告ぐ　死ぬな　内村鑑三　八二三
有島さんの最後　厨川白村　八二三

社會思想家としての有島氏　千葉龜雄　八二九
有島武郎氏の死について　平林初之輔　八三三
武郎さんの死　武者小路實篤　八三八
『永遠の叛逆者』有島君　長谷川如是閑　八四〇
死んでゆく有島さんへ　八四三
有島さんと波多野さんの記念の爲めに　瀧田哲太郎　八四五
武郎氏の死　中村吉藏　八六一
覺え書き　本間久雄　八六三
第二文化の末路（追憶錄手記から）　秋田雨雀　八六五
有島武郎君の戀愛關係　島崎藤村　八六七
有島武郎氏の死について　石原　純　八六九
ブロンズの手——（有島武郎君追悼手記から）——　秋田雨雀　八七五
血の力　片上　伸　八七九
永久に若い人　上司小劍　八七九
童話の話　宇野浩二　八八一
武郎さんの死を悼む　長與善郎　八八四
有島氏の死　正宗白鳥　八八六
有島氏について　藤森成吉　八八八
人間苦闘史の一頁（追憶錄手記の中から）　秋田雨雀　八八九
あり得る事及びありさうな事　生田長江　八九一
有島氏の死に對する世評について　柳澤　健　八九八
有島武郎氏の死に就て　有馬頼寧　九〇一
波多野秋子氏の靈に捧げて一切を明かにす　嶋中雄作　九〇五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋子さんの思ひ出　石本静枝　九三三
宿命の力と創造の力　羽仁もと子　九三八
ありがちの變態　三宅雄二郎　九三一
享樂的職業婦人を排す　長谷川如是閑　九三三
有閑階級の運命を暗示する　山川菊榮　九三六
二人

有嶋氏を死に導いたもの　青野季吉　九三九
何故死んだ乎　麻生久　九四〇
幻滅と暗示　新居格　九四三
有島君の死に面して　吉野作造　九四六
僕に取りての有島武郎　足助素一　九四七

解題……九五一
索引……巻末

補

遺

短　歌

霜白き河原に生へる野茨の赤き實こそは冬に親しき

美しきもの皆脆し鈴蘭のとくしほめるか美しきかな

よき人のまゝに涙はまかせてむ男榮えある眞額の汗

我も見し人にも見せしほろ〳〵と風なき谷に散る櫻花

大空は今光なりあらかねの土につゝめる麥の芽めてたし

俳句

青桐の下に老師の碁を圍む

青梧や離れに謡うたふ聲

山登る人の背にさす團扇哉

書簡

大正四年

二五九二　一月二十四日　吹田順助宛

〔封のみ、墨筆、年次推定〕

〔表〕札幌區北八條東二丁目十二番地　吹田順助様　必親展

㊙□　〔鈇〕・1・25　前0—12

〔裏〕一月廿四日夜　鎌倉海岸通停留所傍　有島武郎拜

㊙□　□・1・27　□□—8

大正五年

二五九三　十月二十一日　吹田順助宛

〔官製はがきペン〕

〔表〕鹿兒島市清水町一六三　吹田順助様　膽振國虻田郡狩太村　有島武郎

㊙膽振・狩太　5・10・21　□

Oct, 21, 1916

My dear Friend: ——

Yours of Oct. 15th was eagerly received in the solitary lodging of Kaributo Farm. Your lines drop on me like a merciful rain on the parched deserted heath. They gave my melanchory heart warmth, power, solace and what not, which revive me to the full. From window I can see but a dark gloomy sky and withered trees stretching over as far as sight goes. But I feel, thanks to you, enveloped with warm whirl of human affinity which lies deep in every man's bosom. Thanks, and again redoubled thanks!!

I shall be back in Tokyo before the last of this month.

〔譯〕

一九一六年十月二十一日

親愛なる友よ——

十月十五日付のあなたの手紙は狩太農場の淋しい小屋で嬉しく受け取りました。あなたの言葉は僕にとって乾ききった荒野の惠みの雨のようでした。憂鬱な僕の心に、溫かさ、力、慰めといったものを與え、大いに力づけてくれました。窓からは暗い沈んだ空と眼路の限り續く枯木ばかりしか見えません。しかし、あなたのお蔭で、誰もが心の深いところに持っている人なつかしさの溫い渦に包まれていると感じます。有

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com